

調査レポート



Report on research

「経済性志向」と「簡便化志向」が調査開始以来の最高値に

—消費者動向調査(2025年1月調査)—

今回調査では、食に関する志向、国産かどうかを気にかけるか、日本の将来の食料輸入についての考え、環境に配慮した農産物・加工食品の購入などについて調査しました。

食に関する志向は「経済性志向」

「健康志向」「簡便化志向」が3大志向となりました。今回調査では3大志向はいずれも上昇し、「経済性志向」と「簡便化志向」は2008年の調査開始以来、最高となりました。日本の将来の食料輸入について「不安がある」とする割合は約8割となりました。不安を感じる

理由は、気候変動や自然災害への懸念が最も高くなりました。

農産物購入時、環境に配慮した方法で栽培された農産物かどうかを「気にかけている」とする割合は約4割となりました。環境に配慮した方法で栽培された農産物としてよく購入するものは「地産地消の農産物」が最も高くなりました。

食に関する志向

3大志向すべてが4割超に

現在の食の志向は、前回に引き続き「経済性志向」「健康志向」「簡便化志向」が3大志向となりました。

た図1。

「経済性志向」は45・6%と前回の2024年7月調査から1・4

ポイント上昇し、調査開始以来、最高値を更新しました。「経済性志向」は23年7月調査以降、4回連続で40%を超えて推移しています。年代別では20歳代から40歳代で半数を超えました。「経済性志向」を選んだ理由は「物価が上昇しているから」、心がけている行動は「できるだけ安い商品を選んで購入」がそれぞれ最多となりました。

「健康志向」は44・0%と前回から0・8ポイント上昇しました。年代別では「健康志向」は年代が上がるほど回答割合が高い傾向となり、60歳代以上で半数を超えています。「健康志向」を選んだ理由は「自身や家族の健康状態に改善すべきところがあるから」、心がけている行動は「野菜を多く食べる」がそれぞれ最多となりました。

「簡便化志向」は40・3%と前回から4・8ポイント上昇し、調査開始以来はじめて40%を超えました。年代別では、前回から9・7ポイント上昇した70歳代(27・5%)をはじめ、すべての年代で上昇しました。「簡便化志向」を選んだ理由は「調理・片付けなどが面倒だから」「心がけている行動は「冷凍食品を活用」がそれぞれ最多となりました。今回調査では、食の3大志向がいずれも上昇し、ともに40%を超

える結果となりました。長期的にみると「健康志向」は高い水準を維持しており、「経済性志向」と「簡便化志向」が上昇傾向にあります。近年は物価上昇により食費を節約したいという消費者の意向が強まっていますが、単に価格が安いものを求めるだけではなく、健康に配慮したり、家事の手間を省いたりするのを重視していることがうかがえます。

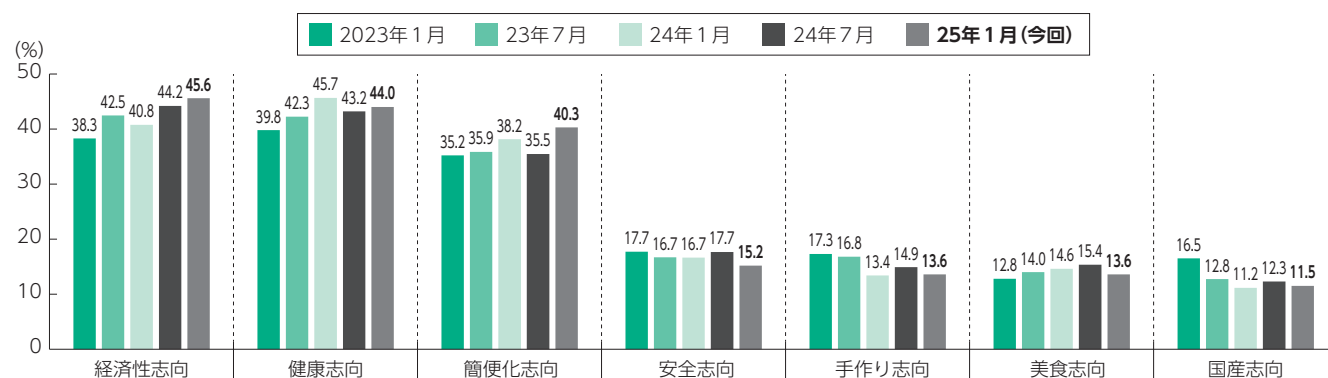
食料品を購入するときに原材料が国産品かどうかを「気にかける」割合は66・0%と、0・3ポイント低下しました。年代別にみると、おおむね年代が高くなるほど「気にかける」割合が高くなりました。

国産食品に対するイメージについて、価格が「高い」とする割合は61・1%と3・3ポイント上昇しました。一方で輸入食品は、価格が「安い」とする割合は45・3%と、2・5ポイント上昇しました。

品目別の価格に対するイメージでは、国産品を「高いと感じる」と回答した割合は、「牛肉」が73・1%と最も高く、次いで「果物」が66・8%、「生鮮野菜」が61・9%となりました。輸入品を「安いと感じる」と回答した割合は、「鶏肉」が43・8%、次いで「豚肉」が37・6%、「牛肉」が35・7%となりました。

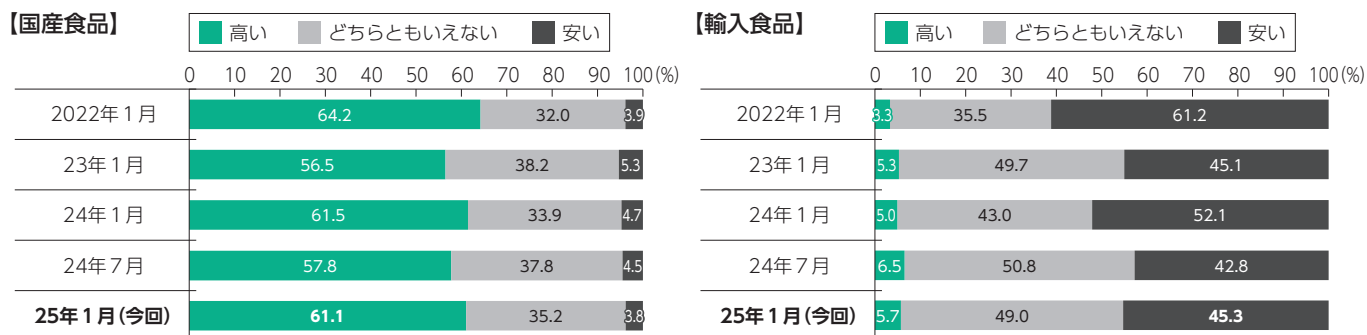
◆経済性志向、簡便化志向が過去最高

図1 現在の食の志向(上位)の推移／2つ回答



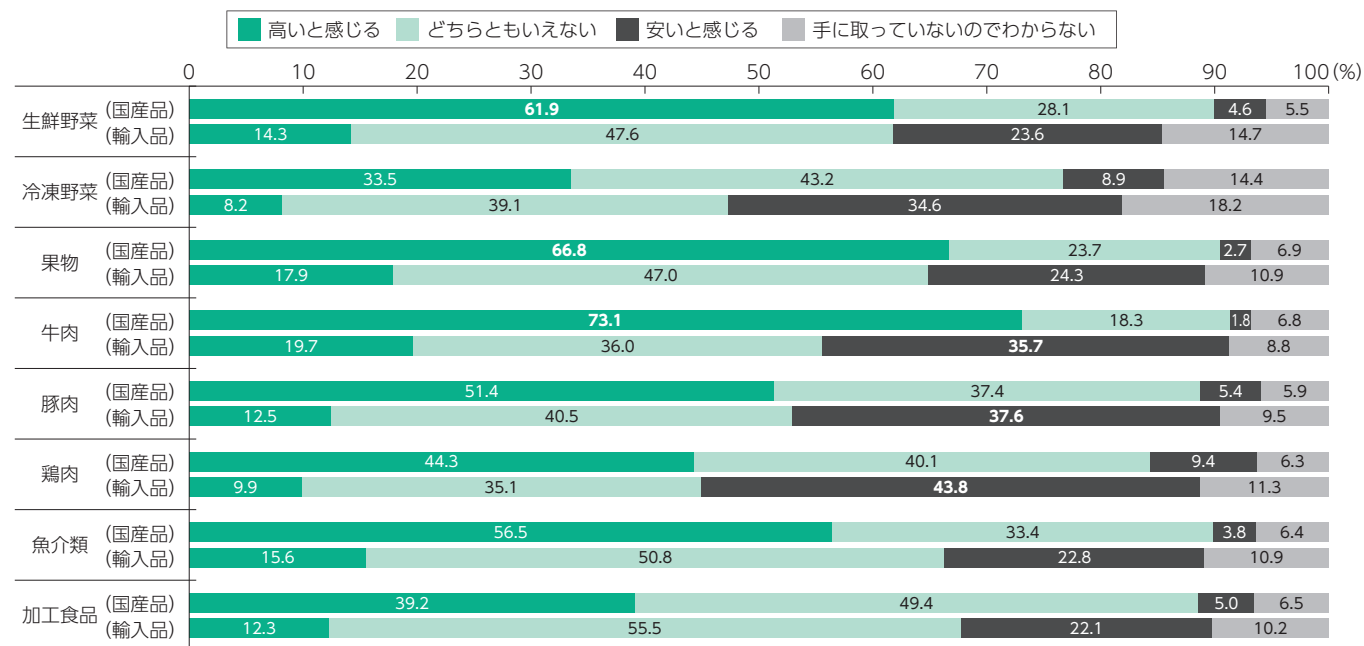
◆国産食品は「高い」、輸入食品は「安い」が上昇

図2 国産食品に対するイメージ



◆国産品を「高いと感じる」と回答した割合は、「牛肉」が最多

図3 国産品・輸入品の品目別の価格イメージ



国産食品の輸入食品に対する価格許容度では「割高でも国産品を選ぶ」割合が全体で2・4ポイント上昇し、56・0%となりました。「3割高を超える価格でも国産品を

選ぶ」割合は3・4ポイント上昇し、15・1%となりました。また、「国産品へのこだわりはない」割合は0・2ポイント低下し、15・2%となりました。

将来の食料輸入についての考え

8割が「不安がある」と回答

日本の将来の食料輸入について「不安がある」とする割合は81・2%と、前回2024年1月から3・4ポイント上昇しました【図4】。年代別では、「不安がある」と回答した割合は年代が上がるほど割合が高い傾向となっています。

「不安がある」と回答した方にその理由を尋ねたところ、「気候変動や自然災害が輸出国における食料生産に影響を与え、必要な輸入量を確保できなくなる懸念があるから」が32・7%と最も高くなりました。

年代別では、20歳代から50歳代

では「紛争や政治的な緊張、輸出国の政策変更などにより、必要な輸入量を確保できなくなる懸念があるから」、60歳代と70歳代では「気候変動や自然災害が輸出国における食料生産に影響を与え、必要な輸入量を確保できなくなる懸念があるから」が最も高くなりました。低い年代では紛争などの社会的な事象に対する懸念が高く、年代が上がるほど気候変動などの自然環境的な事象に対する懸念が高くなる結果となっています。

を「気にかけている」とする割合は42・1%となりました【図5】。

年代別では、「気にかけている」とした割合は70歳代が最も高く、30歳代が最も低くなりました。一方で「いつも気にかけている」に限った割合で見ると、30歳代が最も高くなりました。

環境に配慮した方法で栽培された農産物としてよく購入するものは「地産地消の農産物」が51・0%と最も高く、次いで「減農薬や無農薬で栽培された農産物」が29・5%、「有機農産物」が27・3%の順となりました【図6】。

年代別で見ると、「地産地消の農産物」は年代が上がるほど回答した割合が高く、70歳代では60・8%と全体を9・8ポイント上回りしました。また、「有機農産物」はおおむね年代が下がるほど回答した割合が高くなりました。

環境に配慮した方法で栽培された農産物かどうかを「気にかけている」と回答した方にその理由を尋ねたところ、「食べる人の健康に配慮しているから」が64・3%と最も高く、次いで「品質が優れていると思うから」が44・2%、「生産者の思いや考えに共感しているから」が33・1%の順となりました【図7】。

た農産物について、そうでない農産物と比べて価格が高くても購入したいと思うか尋ねたところ、「割高でも環境に配慮した農産物を選ぶ」と回答した割合は59・4%となりました。

年代別では、20歳代から50歳代は5割台、60歳代では約6割、70歳代では約7割と差がみられる結果となりました。

環境に配慮した農産物かどうかを「まったく気にかけない」と回答した方に、環境に配慮した方法で栽培された農産物を購入するため求める条件を尋ねたところ、「価格が今より安価である」が58・3%と最も高く、次いで「食味が優れている」が20・6%、「身近で販売されている場所が増える」が20・0%の順となりました。

結果の詳細は日本公庫ホームページで掲載しています。

(情報企画部 黒川 知洋)

【調査概要】

- 調査対象 全国の20歳代～70歳代の男女各1000人
- 調査時期 2025年1月
- 調査方法 インターネットによるアンケート

注・図は四捨五入の関係上、合計が100%にならない場合があります。

環境に配慮した農産物の購入

「地産地消の農産物」が最多

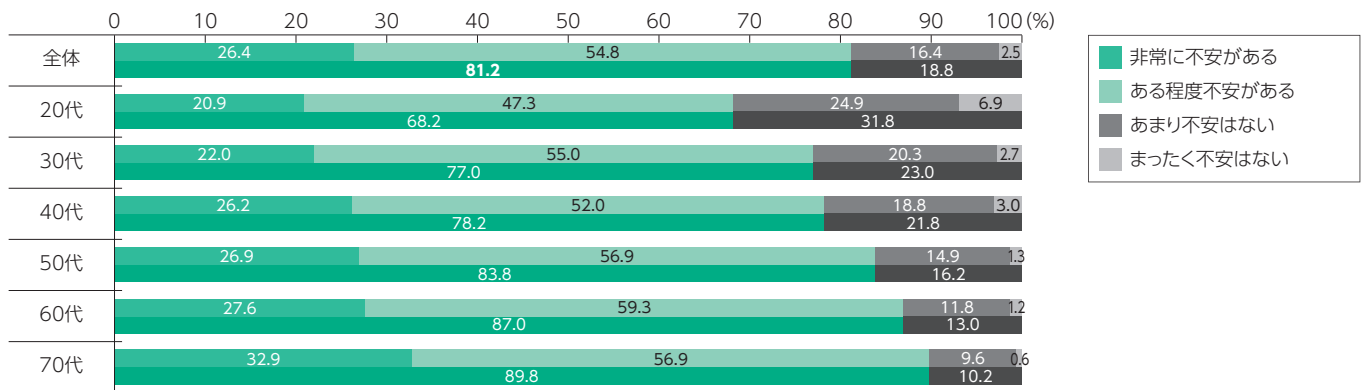
農産物購入時、環境に配慮した

方法で栽培された農産物かどうか



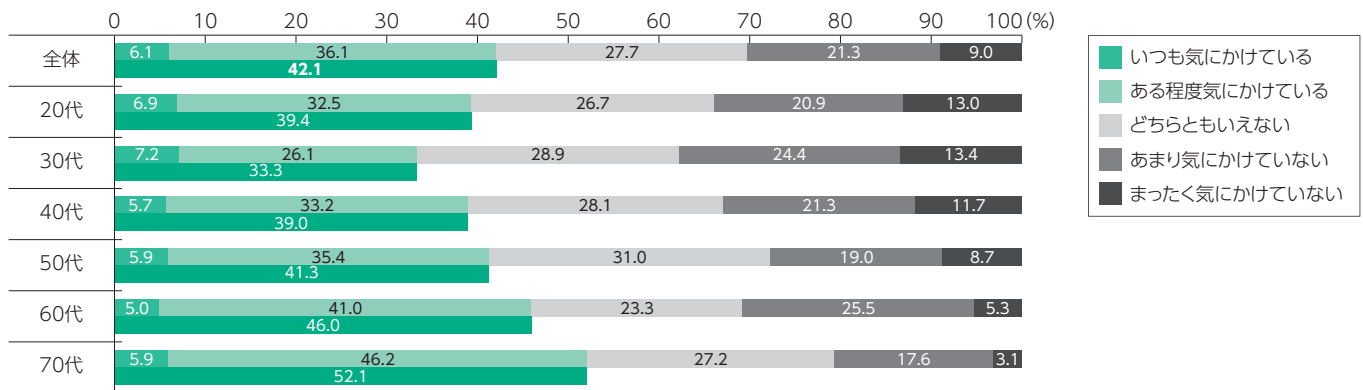
◆将来の食料輸入 8割が「不安がある」と回答

図4 日本の将来の食料輸入についてどのように考えているか



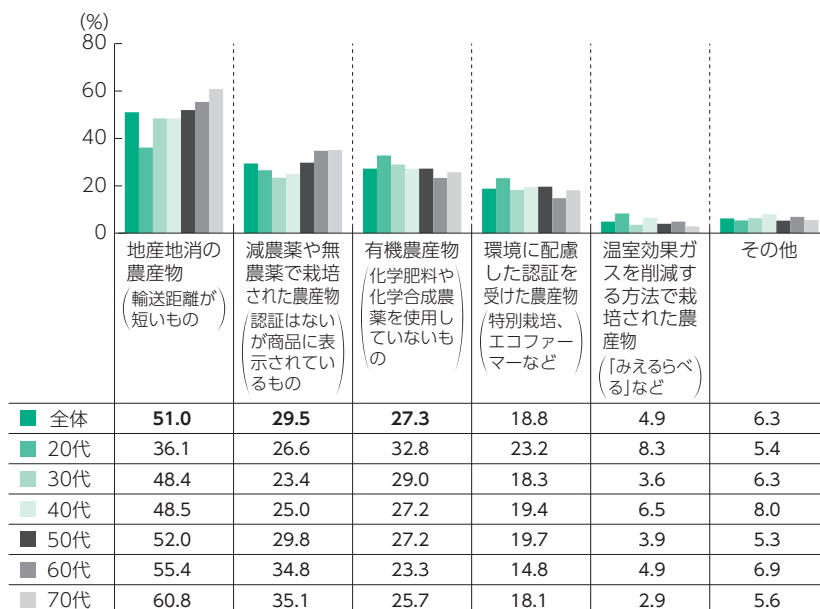
◆環境に配慮した方法で栽培された農産物 4割が「気にかける」と回答

図5 環境に配慮した方法で栽培された農産物かどうかを気にかけるか



◆よく購入するのは「地産地消の農産物」が最多

図6 環境に配慮した方法で栽培された農産物として、よく購入するもの／複数回答



◆「食べる人の健康に配慮しているから」が最多

図7 環境に配慮した方法で栽培された農産物を選ぶ理由／複数回答

